

生活美学研究の今後(2) 五感と第六感

－身体感覚についての試論－

生活美学研究所 森 田 雅 子

1. 目的

シリーズ第一回目では戦後から今日（2014年）に至るまでの「生活美学」という用語がつかわれている文脈をデータベースから122件抽出し、7種に分類した。その際、生活美学という言葉のなりたちについては触れていなかったが、現時点ではAesthetics of Everyday Lifeの翻訳語であると類推している。私が抽出できた範囲内では戦後からの使用のみ確認できている。戦前戦中を乗り越え、戦後になり噛みしめた言葉なのだろうか。この点については、さらに調べる必要がある。少し長きにわたるが、前回の論旨の一部、生活美学の7種の「定義」を振り返ってみる。

ここではまず身体感覚に刺激を与えるもの全てを審美的観賞の対象とし、生活に潤いを与え、生活質感を高めるための行動指針となるものを生活美とするという観点をまず再確認しておく。官能こそが否応なく誕生から死に至るまでの我々の道標となっているからである。

しかし、まず、便宜上、嗅覚、味覚などに美の市民権を与えない、という「古典的」原義の出発点を示し(①)、そこから身体感覚が完全なる美の市民権を得た到達点(⑦)を示す。その他 借用義、派生義として②～⑥の意味を区別してみた。特に③～⑥は重複、会合するニュアンスがある。

① (生活) 美学は存在しない (否定)。

生活は混沌、未分化で構造が不明確である。また嗅覚、味覚は好悪や利害(幸福感・安心・不安・恐怖・忌避)の対象であり、美的評価の対象にならないとする。

② 生活美学を生活学と美学の会合とする (会合)。

生活を定義し、美を定義して会合する領域を特定する。

③ 生活美学を人生における处世術、作法、身だしなみと結び付ける (範)。

④ 生活美学を衣食住を中心とした消費経済の枠組で捉え、デザイン消費と結び付ける (型)。

⑤ 生活美学を生活の豊かさと潤いを求める生活行動の目的とする (喜び)。

快樂享受の構図を用いる。

⑥ 生活美学を生活行動のリズムを整え、新たな出発に軌道修正する岐路の指標（分岐点）を特定し利用する生活の知恵の源泉とする（悟り）。

⑦ 美学を生活美学と同値とする（身体感覚）。

感覚器官を利用して動物（人間）の生活環境の偵察、再現、ナビゲーションを通じて生きながらえる。これらのサバイバル行為は、一連の刺激に対する直接的で基本的な認知「エステーシス（aesthesia）」行動の基盤により成り立つ生活美学と同一とする。

7種といっても、生活美学を否定する①の定義は生活実感としての解説はなく、いわば机上の空論であるが、古典に対する敬意から持ち出されるのみであった。残る6種類の生活美学の意味を文脈より抽出する作業で前回確認できたのは、生活美学というキーワードの存在そのものが、古典的哲学の美の絶対的評価の中立性をゆるがしている、ということになる。つまり、人々は様々なレベルで美を感じ、美を追求するのは、自分にとってのより良い、正しい在り方の指標を追求するためであり、生活行為がサバイバルにかなっているかの指標とするためである。ことごとく自分の利益にかなったものは美しいと感じるのである、あるいは美しいものを求めるのは自分の利害に一致するという前提があつて、展開される文脈のみ見出したのである。

Aesthetics of Everyday Life というキーワードで欧文を検索すると、第一回目でも示唆したように、1970年以降の全世界的な流れとしては、古典的美学の平明な中立性の立場は、依然としてタブー視されている向きがあるが、反旗を翻す陣営が増えている観がある。現代市民生活はビッグデータの渦巻くネット社会のなかで営まれる。18世紀の古典的美学樹立期とは違い、現代の世相は混沌があらゆるレベルで激化し、飛散している。ヴォルター・ベンヤミンはイメージの資本主義化にはじめて我々を気づき、デザイン資本主義の到来を予知した¹¹⁾。しかし21世紀の現代人を購買行動に駆り立てるには、より一層の、より洗練された視覚を中心とした五官へのシアピールは欠かせないものとなってきている²¹⁾。ビッグデータの大海原上で、幸福を求めての人類のネットサーフィンが過熱すれば、するほど、美というものは中立でありえないことが紛れない実感となってくる。

従ってシリーズ「生活美学研究の今後」第二回目はハイブリッド、可愛いを取り扱おうと予告したが、違う筋立てとなった。今回は生活美学を、その日常生活的な根拠となる五官から見つめ直し、生活美学の新たな地平を、私たちの内面に探索し、再確認する。

仮説としては、前回の定義づけをさらに推進し、美とは何か魅力を感じるもの、陶醉するものであり、醜とは忌避するもの、汚れや危険の波及を恐れるものであるとする。五官で整理すれば、それぞれの快不快の感覚で判断するものだと考える。つまり、ある模様がある人にとって不快であれば、それは醜と判断するということになる。幸福と感じる、可愛いと感じる、無関心を呼ぶ、あるいは焦燥感を感じる、困惑を感じる、危険を感じる。このようにいろいろな段階での感情的評価の段階がある。それは究極判断する人の利害と密

接に結びつく評価となると考える。これを日常の実感として成立するかどうか、検討する。

2. 方法 —美は行動の基盤となることを検証するには—

以下に先回「生活美学研究の今後(1)」で抽出した最先端の生活美学の意味を掲げる。

⑦ 美学を生活美学と同値とする（身体感覚）。

感覚器官を利用して動物（人間）の生活環境の偵察、再現、ナビゲーションを通じて生きながらえる。これらのサーバイバル行為は、一連の刺激に対する直接的で基本的な認知「エステーシス（aesthesis）」行動の基盤により成り立つ生活美学と同一とする。

先程言及した生活美学の7番目の意味から出発して、美が行動の基盤となっているかどうかを検証する研究方法を策定する。美について調査するのであれば、おのずから対局にあると考える醜についても調査することは、表裏一体であると考えられる。

方法については生活行動を日記や文献調査、フィールドワークを加味して、重要な項目を洗い出し、検証する。

2.1 日記の手法

ここで、日記の手法について述べる。今回は社会学領域での定性調査（質的調査）の手法として最近注目される日記の社会的、生活質感的分析利用の手法についてアラゼブスキーを参照する³⁰⁾。アラゼブスキーによると、この点に関して日本は先進的である。日本では古来より日記文学というジャンルが確立している。そして和歌、短歌、俳句などビジュアルを中心にではあるが、日常を切り取り、その時々々の状況を表す文芸が社交上のツールとなっていた。特筆すべきは清少納言の随筆『枕草子』で、季節の流れを意識して、をかしという感覚を醸し出したモノ・エピソードなどを蒐集したゆるやかな日記形式となっている。源氏物語は諸説あるなか、本体は同時代人の紫式部の執筆とされ、もののあはれを核心に置いた物語展開である。両者に共通するのは人間界・自然界における移ろいに対する意識の高さである。アラゼブスキーは千年以前からの、こういった時系列での生活質感の変容に対する意識の高さを評価している。しかし調査の際に被験者に記入を依頼する日記の書式は千差万別であり、カスタムメイドで調査目的にあわせる。残念ながら、日本の日記文学も人類の歴史の中の一つの事例に過ぎない。

2.2 文献調査とフィールドワークの手法

生活行動の文献調査・フィールドワークの手法について述べる。五つの感覚を中心としながら行われる、必需行動や拘束行動、自由行動、情報行動などの生活行動を想定し、キーワードで文献を検索する。現在において、その感覚がもたらす快感・美感と生活行動が

どのような関係性にあるかを探る。使用されたキーワードは味覚（美食・粗食・食感）、触覚（素材）、視覚（色、形、光）、聴覚（音・声）、嗅覚（悪臭・香り）、運動感覚（身体と空間、移動とスピード）、温冷感・空気感、第六感・靈感、物語とゲームの美学などである。フィールドワークとは、現実生活においての実体験を振り返り、記述することとする。

3. 結果

3.1 美醜の採集日記から

日記は、時系列での評価の質的変容、そして価値尺度の主観性・相対性・関係性を浮き彫りにするという点で、優れた記録媒体である。そういった点に着目し、現代版 枕草子として美醜の採集とランキングを 118 名に行ってもらって、エピソードごとに状況を描写してもらった。一つの発見は 2 百年前有余のカントの指摘のとおり、美と快感と善というものは感覚的にその人の中では隣り合わせであるということである⁴³⁾。対局にある醜についても不快感と悪という領域と隣接している。

ここでは美醜についてさらに述べる。醜とは、『新字源』によれば、によれば、旁（つくり）簪をさしている巫女を表し、あるいは人が大きな面をかぶっている様を表し、または人の血痕の跡を示す（小川環樹 西田太郎 赤塚忠 1980）。扁（へん）の酉は酒を器に注いでいる様と音を表すという。神に仕える人などを忌むことから、みにくいの意味と転じた。幸せを脅かす不吉なものを避ける、つまり不安や恐怖の領域から逃れるという意味がある。実際辞典をみると、外観のみにくさや、軽蔑すべき特徴を有するという意味合いでの運用や熟語が多いと感ずる。軽蔑するということは、自分の立場を脅かしているので、他者を貶めて自分が安心するという面があると考える。

平成 27 年度（2015 年度）前期、「生活美学論」という講義で美醜の採集をテーマとして、118 名の受講者に日記をつけ、美醜ランキングをつけてもらった。詳細についてはまだ集計中であり、途中経過についてのみ述べる。また、個別の事例の公開については承諾を得ていないので、しない。

同じような出来事でも、個人によりランキングがちがったり、美醜の領域が入れ替わったりした。あるいは機会を設けて美醜のコレクションを希望者には共有してもらったのが、交互にそれは美の範疇ではないのではないかと、醜の範疇ではないのかと指摘があった。これはディドロなどの説で、美は関係性のみにおいて成立し、相対的性質が強いという説と一致している²⁴⁾。また美醜の感覚はおおむね人間関係、とそれに派生する行事、暦、それぞれの季節の自然現象、そして天候のよしあしと強く関連があったと結論づける。特定の配置、構図、構築物などに対する審美的反応は比較的少なかったと感ずる。これは後程述べる心理学的研究の結果とも一致している³⁸⁾。

年齢、性別、あるいは教養、そして講義のインプットに影響を受けている面もあると考える。しかしそれらと関わりなく不変の要素もあると考える。美醜は生活の指針をたてる指標になっていると推し量る。憧れを感じる対象、魅力を感じる対象、幸せをもたらす対象、身を脅かす危険や不快を催す向かっ腹の対象が行動や忌避の要因となっている。つまり美醜は自分の利害が関わる要素についての価値判断であると考え。いや、そうではない、美醜の判断ではなく、幸せか、不幸せに感じたかの判断であったという反論もありうる。しかし、それに対する反駁としては、ワインスタインら研究成果と共に、もともと美醜と幸不幸の価値は重複していて区別できないものであるともいえる。

3.2 結果 文献調査・フィールドワークの要約

—生活の中の美感—五感と第六感、そして共通感覚—

モーリス・メルロ＝ポンティによれば人の身体は人の意志をあらわし、行為を実践する本体である³⁾¹²⁾。身体の舵取りは五感を通じて得る情報を吟味して実践される。神経生理学的にいうと、我々の感覚は全て触覚を基底にして成り立っている。我々の認識に化学成分との感覚的接点をもたらすのは味覚や嗅覚であり、離れた場所にある事象を光線のもと、認めるには視覚が、音を介して他の生き物などの気配を感じたり、言葉や発声で意志を確認しあうのには聴覚が、役に立つ。この数千年の人類の歴史の流れをみると、五感以外にも痛覚、温覚、冷覚、圧覚、平衡感覚、など多数の感覚の存在が発見され、科学的に検証された歴史的経緯がある²⁹⁾。様々な感覚は、我々の認識の中核に向けて求心的に集約され、共通感覚とも呼ばれる第六感的な統合を経て、人は行動を起こす決断に至る⁸⁾。カティア・マンドキによれば感覚は快、美を求め、不快、醜を回避する。美しいものは正しく、正しいものは美しく感じる仕組みが生理的に出来上がっているのである。論理的に完璧に装備され、下された判断でさえも、根底には五感を通じて収集した情報がある。論理は感覚の情報集約の力、感情の表現の力を下敷きにして初めて成り立つ⁴⁰⁾。

触覚についてである。触覚は全ての感覚の母であると考え。マンドキによると、人の感覚による伝達系統は生物の祖先の単細胞で活動している数十億年前からの進化の過程での伝承により組み立てられたものであるという。私は単細胞生物やプランクトンの鞭毛が、いわば我々の神経系統の先駆けとなったり、四肢の予兆となっていると推測する。触覚は全ての感覚の母であるが故、視覚、聴覚、嗅覚による情報の検証に役立っている。また、むしろ、検証というよりは、他の感覚に奥行を与えるのに役立っている。

味覚について考えてみよう。味覚というのは嗅覚と触覚、温覚、圧覚、冷覚、聴覚などと連携して作用しているといえる。例えば味覚で大きな要素を占めるのは食感という項目であり、食感が高まると、食品の好ましさは引き立てられる。味覚というのは供食の時点から、食事が口中で咀嚼され、唾液と搗き交ぜられ、咽喉から、最終的に食道に嚥下される過程まで、数段階にわたり発生する感覚である⁵⁾。味覚に関しては平成25年の生活美学研究所秋季シンポジウムテーマで伏木亨も述べているように、多分に文化的側面に影響さ

れる¹⁵⁾。食文化というのは人間にあるだけのものなのか¹⁴⁾については断言を避けるとしても、料理するのは人間だけであるという²⁰⁾。料理することにより、五つの基本味、甘味、辛味、鹹味、酢味、うま味に加えて、不了味（病み付きの味）などにより、調味し、栄養の吸収を高め、人間の身体的状況を改善し、文化活動の発展を助けてきた。

一般的な傾向として、近年 美食と粗食という二極化がみられる。蚕衣美食、対しては粗衣粗食という言い方もある。悲しいかな、大航海時代以来、美食のためとはいえ、奴隷貿易で得た収益で、新に発見した不了味チョコレートに対する王侯貴族の嗜好を満たしていたのである³²⁾³⁶⁾³⁸⁾。粗食とは穀物、野菜などを中心とした地産池消のストイックな食事であり、美食は一般的に肉、油脂や舶来の珍味などをふんだんに使った贅沢な料理といえる。粗食は菜食と共通する部分があり、仏教やヒンズー教の教義になじむとされる。しかし菜食主義とはいえ、厳格な意味での菜食ではなく、魚卵、鶏肉、乳製品などの摂取は許容する場合も多い。動物由来の成分を使用した産物の利用は、拒絶する場合もある⁴⁾¹⁰⁾¹²⁾。

イタリアのスローフード運動も特記すべきである。カルロ・ペトリーニがローマの中心部スペイン広場にファストフードチェーンのマクドナルドが開店すると聞いて、1986年始めたスローフード運動である⁴²⁾。日本のおぼんざいに相当するピアット・ポーヴェロもまた、スローフードの機軸であるといえる。ピアット・ポーヴェロとは、主食を中心として、粗末だが自然の素材を手抜きせずじっくり調理した食事という意味で、残り物だったり、ありあわせを利用し、無駄をせず食いつなぐという趣旨である。味覚・嗅覚は食事の安全を見守る門番である。あそして遠くからの存在の気配を伝えるのは嗅覚の働きである。

次に嗅覚について述べる。最近では環境意識の高まりから、環境の質のセンサーとして嗅覚に着目し、日本では特に官能評価の方法で悪臭を検査する方法があみだされている。臭いや香りに関する商品も近年特徴がある。嗜好品として従来より貴族階級や富裕層に利用されていた香水は、さまざまなフレグランスに分化し、またフェロモンを加味された商品も出回っている。香水を直接体につけるという形ではなく、柔軟剤だったり、入浴剤、アロマなどで、間接的な香りづけを雰囲気を楽しむ商品が出回っている。また自己臭に関する悩みが増えているようだ。

聴覚についてである。聴覚は音、あるいは声を基本的な要素としている。ところで、『新字源』によると音、言は漢字のなりたちとしては、口から発する心を表すということである（小川環樹 他 1980）。音、言は音曲や文芸など芸術的な組織に組み立てられるし、時間芸術的な構成も可能である。基本的には感情の発露ともいえる。又、内耳には三半規管があり、平衡感覚をつかさどっている。さらに聴覚を通じて、リズム、メロディー、ダイナミックス、感情など様々な要素を伝えることができる。

聴覚という感覚を通じて、わかること。言と音は漢字の起源としては口から心が出るという意味であると申し上げた。音はさらに調しらべの意味合いが付け加えられるとする（小川環樹 他 1980）。みずから発する音声は、腸音、ゲップ、嘔吐物、排泄物とともに、すべて生き物としての内面の発露である。さらに注目すべきは、その音声を意味の記号体系と

して組立て、リアルタイムのコミュニケーションに使うばかりでなく、文字記号を体系的に表し、文章で思索、思想を伝えるだけでなく、保管し、記録する、継承するなどの作業を行うことである。これは聴覚と視覚、そして記憶・手部の運動という機能が密接に連繋して行われる。そう考えると、どのように気高い理念であっても、我々の身体感覚なくしては構想されず、受容も反映もされない。

視聴覚は、全ての感覚のなかで、極めて優位である。たとえば、美の感覚を感じる対象は色と形を中心として圧倒的に視覚で感じた美であることが多い。しかし、前述したように、様々な美感は、視覚から伝達されたものでせよ、他の感覚による裏打ちがなければ、実感を伴わないものは多いのではないだろうか。特に視覚は他の情報による実証的裏付けないと、虚実の見分けがつかなくなる。そのいい事例がミニチュアである。我々の身边には様々なレプリカやミニチュアが溢れている。我々の掌中に有る時には、我々が実物、例えばロダンの考える人を目線で捉えて視界に置くときより簡便に観照できる。我々が実物の詳細を確認するときには、台座の回りをぐるぐるまわらなければならないが、掌中にあるミニチュアは、角度を少し変えてやって観照すればよい。しかしある一定の距離を離れてその彫刻全体を視界にとらえると、他の事物との大小関係は排除して考えれば、まさにミニチュアと同一のサイズに見える時がある。

例えば動物の求愛行動においてもビジュアルな美や、音感の美は圧倒的に凌駕するという。たとえば尾羽の美しさであったり、歌声の美しさであったり、視聴覚で圧倒するのが勝ち目があるようである。これは植物でさえ、視覚がしっかり備わっているかのように、見目美しい色彩や、擬装を行うということからも我々には当然の事のように思える。

運動感覚というものについて考えてみよう。身体と空間の美学としては身体寸法を尺度としてさまざまな造形が考えられる。これも空間を味わうには時間的経過なしには、拡がりや陰翳は味わえない。逆に時間の経過は、ある空間の、ある地点においてしか経験できない性質のものであることがわかる。つまり空間の美を経験するには、時間的経過を刻む身体が存在なしにはあり得ないということである。さまざまな芸術のジャンルにおいて、時間・空間の要素を利用して、観照者、視聴者の内面に物語などの象徴的過程やイメージを構成していく。しかし注目に値するのは、最近の心理学研究では空間（場所）の美は、特定の空間的構造、構成というよりはその場において体験した生活質感（幸福感）が高ければ、美と判断されるという研究が発表されている³⁸⁾。

移動とスピード感の美学についてである。移動とスピード感の美学は、やはり第一次世界大戦勃発前夜のイタリアはミラノからマリネッティ (Marinetti) らにより発信された未来主義 (futurismo) を検討しなければならない²⁶⁾。同じ時期、ル・コルビュジェが山の裾から地形に沿って緩慢に登るロバの道を否定し、歴史的広場の破壊を提唱し、都市の中枢に向かって高速道路や鉄道を敷設し、飛行場や駅を配置することを主張した。未来主義はイタリアで第一次大戦後台頭しつつあるムッソリーニ率いるファシズム全体主義にも迎合する形となった。産業革命以降に自動車、鉄道の発明が生活のリズムを加速化させた。車

窓の風景は変わって、人々の視線もスピードの変化というものをビジュアルに捉えた。19世紀中葉以降に新たに写真、そしてフィルムリールを稼働する初めての動画は、さまざまな事象や身体の動きを連写し、動態や変容の美学というものを我々に教えた。あの有名なアントニオ・サンテリアの建築プロジェクトのデザイン画にもその美学は現れている。大航海時代のバロック様式と一致するのだが、整然とした正円ではなく、変容途上の楕円を、垂直線、平行線ではなく、斜線を多く取り入れた。

目を転じて現代を見ると、漫画には良くこの移動とスピード感の美学が利用されていることに気づく。特に少年向けの漫画、スポーツ漫画に多いようだが、スピード線や力線を人物の動態や感情表現の際に用いて、コマの分割や物語の起伏を伝えている。これと少し似ているのがプレゼンソフトのアニメーションである。ズームイン、ズームアウト、転回、フェイドイン・フェイドアウトのアニメーションにより、要点や、変化を強調できる。それらは音声やビジュアルを付加することにより、イメージや事柄の登場に注目を喚起するのである。

温冷感と空気感の美学について考える。温冷感や空気感は、触覚に似通った感覚、あるいは寄り添った感覚といえようか。温冷感は口腔内の舌、咽喉そして体腔内の深部感覚ともつながり、味覚に直接影響する。空気感となるとさらに湿度や風圧に対する感覚、そして聴覚、嗅覚も関与してくる。つまり、主にこれらの感覚は、ある居場所、風土が身体的に好ましいかどうかを認識するために利用されるともいえる。

空気感について語るなら、和辻哲郎の風土論は避けて通れない¹⁾。彼は衣食住の生活文化はおろか、上位概念である文明でさえも気候風土に直接影響を受けるとした。その意味で人種、民族という形質よりは、風土による影響に着目したといえる。細かい分類は風土論を一読されるとわかるが、おおまかにいうと、モンスーン型、砂漠型、そして牧場型の風土やその混合型が人々の暮らしと世界観を決定づけるとする。熱帯、亜熱帯のモンスーン型においては季節風に現れる自然の猛威にさらされる生活観には、輪廻と変遷、受け身の条理が根付く。高温多湿で豊饒な風土では、あらゆる生き物が跋扈し、多神教が根付く。

熱帯の砂漠型の風土で、極度に乾燥し、利用する資源の欠如する過酷な灼熱の自然環境においては、生き残りは熾烈な資源の奪い合いを前提とする。従って部族による防衛と部族どうしの容赦ない争奪戦が展開される。そして人格神を崇める厳格な一神教が根付く。

牧場型は尤も安楽な環境であるとする。森を切り開いたり、山間に自然発生的にできた牧草地に家畜を放牧したり、畑を開墾して暮らす。適度な湿り気や水源に恵まれ、極端な乾燥もなく、また気候も寒温帯に位置するため、性格は温厚となる、とする。

ある特定の遺伝形質を持った人種がその風土を好ましいと思い、選択するのか、その風土が伝承される遺伝形質を決定するのか。これはまず、鶏と卵の関係ともいえるが、とりあえず和辻は風土の方を優先的要因とする。例えば、食生活などにおいて、モンスーン型の地域で肉食主義がありがちなのは、慈悲深い民族が居住しているからではなく、周辺の海洋の資源が豊富で、気候に恵まれ主食の収穫が確保できるからであるとする。

4. 考察

4.1 第六感あるいは共通感覚

中村雄二郎は人の五感と、五感以外の感覚の働きに注目し、共通感覚と総称し、非常に詳細な分析を行っている。共通感覚を世間の常識という古典的、あるいは生活文化的な見地も解説していれば、統合する共通感覚としての神経生理学的側面や創造的側面にも言及している⁸⁾。一方、靈感といえ、まず危険を察知する霊的能力というのが解釈の主流である¹⁷⁾¹⁸⁾。これに関してはスタンフォード大学を中心としてパラサイコロジー (parapsychology) という専門領域が樹立されているとされ、科学的な研究に着手しているとする。しかし異論も多い²⁸⁾。他方では、中村や芸術学の分野におけるように、第六感、つまり統合感覚や能力の創造的側面に着目し、靈感と結びつける考えもある。靈感や霊験というものは四大宗教以外でも、どの宗教においても教祖の根源的正統性や預言者の権威を証明するものとなる。政局の判断、実業家の判断、芸術家の創造、我々の日常茶飯における生活行動、これも全て程度によりけりであるが、全て決断をするという本質においては同じである。つまり人類の全歴史は、決して平明な論理の積み重ねだけで、すんなりと変遷を辿ったのではなく、一人一人の直観と行動で突発的に変容され、転回を経験してきていると気づく。そういう意味において、感覚の力、感情の力は皮膚感覚から世界観にまでつながるといえる。実際、人類の歴史の経緯そのものが、人の第六感の持つ甚大な創造力、あるいは残念ながら、破壊力の証となっているといえないだろうか。

4.2 考察—カティア・マンドキの主張—象徴・質感は全生物界に共通するか—

マンドキは生活美学をサバイバルの為の指針であるとし、さらに物語とゲームという要素を美の規範の生成に投入した³³⁾。私はこれをベンヤミン以来の、イメージを中心とした美の受容の分析に終始した点から大きな転回であると考え。もちろんアリストテレス以来、物語の魅力には皆気づいているわけだが、積極的にそれを美の要素として提案しているところに彼女の功績があると考え。この影響で近年のスポーツ、ゲームやアニメの文化の理解を深める分析のきっかけを作っている³⁴⁾³⁹⁾。

マンドキの新たな主張は、以下のとおりである⁴⁰⁾。五感を通じて感じる美には生命体にとって機能があり、用途がある。ダーウィンなどの進化論を楯に、美の判断は中立的であるとするカントの大前提に対立する。カントの大前提はむしろ美の資本主義化、商品化に対して、ブルジョアジーの偽善を正当化したのだと断言する。

特に注目すべきは、マンドキは美という概念を人間界に特有なものであるとしないことである。むしろ何十億年の進化の過程のなかで、生物と共有している感覚部分が美の判断において決定的な裁量を持つのであるとし、美はむしろ何よりも、生物の進化に役立てられてきた要素であるとする。アリストテレスは栄養をもとに成長して、子孫を増やすものは全て魂を持つとした。つまり動物だけでなく、植物にも霊があるということである。

それを説明するに、生き物は、捕食するときも、生殖のためにつがいになるときも、品定めする。その選択の方法がより美しいものの選択となり、さらにより形質の子孫が誕生するのである。美の抽象的価値を否定するのではなく、むしろ文化的、象徴的価値は人間界、動物界はおろか、植物界にもあまねく観られるものとする。この事例として持ち出すのが、さまざまな求愛の際の動物の婚礼色であったり、鳥の営巣行動にであったり、昆虫の鳴き声、鳥の囀り、踊りや植物の擬装や囿である。自然淘汰というもの、最適最強なものの生き残りとは遺伝的形質の伝達を通じて行われる、つがいの選択は美的な観点より雌に行われる。興味深いのは、共生関係にある昆虫と植物は、全く種が違うが、昆虫の好むにおい物質などに関する遺伝的形質を植物が継承する、つまり互いの美的好みの形質を互いが遺伝的に伝えて共生関係を強化するという研究で、マンドキの提案があたかも裏付けられていることである³⁶⁾。

生殖行動においては、マンドキによると、雌が主導権を掌握しているとする。雌は美的観点から気に召した雄のみを受け入れるとする。雌は、雌に受け入れられ、選択されるように、必死に形質を形作り、パフォーマンスを重ねる。捕食行動においては、より美味な、滋味強壯のものを捕える。

何十億年の進化の過程を通じてこのように重奏的に細胞レベルから蓄積されてきた感覚の統合が、美感を伝えて、サバイバルに橋渡ししてくれるのである、とする。ここで斬新なのは、日頃から我々も感じていながら、明言には至らなかったことである。つまり、マンドキの説には全生物界に宿る象徴的価値への憧憬があると主張する斬新さがある。

5. 結語

今回の研究で、生活美学研究の今後に4つの指針を得た。

- ① 生活美学は相対的な価値判断を含み、利害関係を反映すると考える。
- ② 日記を生活美学・生活質感の定性調査に今後とも活用する意義は十分ある。理由は、時系列での変化、価値観の多様性に非常によくマッチしていて、興味深い洞察が得られることである。
- ③ また、感覚を中心とした文献調査、フィールドワークをさらに継続する。むしろ美の範疇の分類にこれからは軸足を移すことも検討する。
- ④ カティア・マンドキはじめ、全世界的にみた独特の生活美学の系譜をさらに深める。

以上、少しでも生活美学研究の今後について深化できた点があれば、幸いである。

【参考文献】

- 1) 和辻哲郎 1935 『風土:人間學的考察』 東京:岩波書店

- 2) アリストテレス[著] 1968 『靈魂論』山本光雄・副島民雄訳(アリストテレス全集[アリストテレス著]出隆監修;山本光雄編;6)
- 3) メルロ＝ポンティ [著] 1981 現象学研究会(編) 『メルロ＝ポンティの研究ノート:新しい存在論の輪郭』東京:御茶ノ水書房
- 4) 諏訪義純 1982 「中国仏教における菜食主義思想の形成にかんする管見一周＝・沈約・梁武帝一」愛知学院大学文学部紀要 104-120 頁
- 5) 勝田啓子 1999 「おいしさとその構成要素」西成勝好 中沢文子 勝田啓子 戸田準 (編) 『新食感事典』東京:サイエンスフォーラム 20-27 頁
- 6) 西成勝好 1999 「食感とは何か」西成勝好 中沢文子 勝田啓子 戸田準 (編) 『新食感事典』東京:サイエンスフォーラム 28-35 頁
- 7) 窪田金次郎 1999 「食感と咀嚼、嚥下」西成勝好 中沢文子 勝田啓子 戸田準 (編) 『新食感事典』東京:サイエンスフォーラム 50-65 頁
- 8) 中村雄二郎 2000 『共通感覚論』岩波現代文庫 東京:岩波書店
- 9) アリストテレス [著] 2001 『魂について』;中畑正志訳京都:京都大学学術出版会(西洋古典叢書)
- 10) 近藤みゆき 2001 「マクロビオティックについて」名古屋文理短期大学紀要第 26 号 45-52 頁
- 11) ヴォルター・ベンヤミン [著] 1935-1939/2003 『パサーージュ論』今村仁司、三島憲一 訳 (岩波現代文庫、学術;101-105) 第一巻 東京:岩波書店
- 12) 田中末男 2007 「宮澤賢治と菜食主義」朝日大学一般教育紀要 No. 33 1-20 頁
- 13) メルロ＝ポンティ [著] 1945/2009 『知覚の現象学』中島盛夫訳(叢書 ユニベルシタス 112) 法政大学出版局
- 14) 大塚滋 2011 「味覚の文化史」武庫川女子大学生生活美学研究所紀要 第 21 号 (2011 年 11 月 15 日) 1-10 頁
- 15) 伏木亨 2011 「味と伝統のサイエンス」Renaissance Symposium '10 秋 味と伝統のサイエンス 武庫川女子大学生生活美学研究所 シンポジウム記録 5-14 頁
- 16) 武庫川女子大学生生活美学研究所 2013 日本の美学「陰翳礼讃」シンポジウム 2012 年秋 2012 年 11 月 17 日 シンポジウム記録
- 17) 村岡哲也 若松洋一 池田弘明 2013 「工事現場等で遭遇する不慮の事故での危機回避行動に関するモデル研究」Reliability Engineering Association of Japan 第 21 回春季信頼性シンポジウム 発表報文集 2013-春季 (21) 39-42 2013-6-12
- 18) 村岡哲也 池田弘明 2014 「不慮の事故の回避に関するバーチャルリアリティを適用したモデル研究」REAJ 誌 2014 Vol. 36 No. 4 (通巻 216 号) 220-230 頁
- 19) 大野斉子 2014 「シャネル NO.5 と帝政ロシアの香水産業」宇都宮大学国際学部研究論集 2014 第 37 号 1-12 頁

- 20) 奥谷文乃 2014 卷頭言「ヒトと料理、そして嗅覚と味覚、粘膜感覚」日本味と匂い学会誌 2014年8月 Vol.21 NO.2 117-118頁
- 21) 白井徹 2015 「5年前より明るさ増す消費者の色彩選好—若年層を中心に「華やかさ」への志向強まる」日経消費インサイト 2015.3.16-23
- 22) 環境省 2015 「悪臭防止法の概要」
<https://www.env.go.jp/air/akushu/low-gaiyo.html> (2015年6月8日検索)
- 23) Merleau-Ponty, Maurice 1964, *L'Œil et l'esprit*. Paris:Gallimard
- 24) Diderot, Denis 1968, *Œuvres esthétiques*. [textes établis avec introductions, bibliographies et notes par Paul Vernière]Paris:Garnier.
- 25) Hulten, Pontus (ed.) 1986, *Futurismo e Futurismi* Gruppo Editoriale Fabbri Bompiani, Milano
- 26) De Maria, Luciano 1986, Marinetti Filippo Tommaso Hulten, Pontus(ed.) 1986. *Futurismo e Futurismi* Gruppo Editoriale Fabbri Bompiani, Milano 509-517.
- 27) Bever, Thomas G. 1988, A Cognitive Theory of Emotion and Aesthetics in Music *Psychomusicology*, Volume7, Number 2, 165-174.
- 28) Dean Radin, Ph. D., with Colleen Rae 2000, Is there a Sixth Sense? *Psychology Today* July/August 2000, 44-51.
- 29) Wade, Nicholas J. 2003, The Search for a Sixth Sense: The cases for Vestibular, Muscle, and Temperature Senses. *Journal of the History of the Neurosciences* Vol. 12, No. 2, 175-202
- 30) Alaszewski, Andrew M. 2006, *Using Diaries for Social Research*, Sage Publications, London. Chapter 1 The Development and Use of Diaries, Kindle Cloud Reader, <https://read.amazon.co.jp>
- 31) Norton, Marcy 2006, Tasting Empire:Chocolate and the European Internalization of Mesoamerican Aesthetics, *American Historical Review*, June 2006, 660-689.
- 32) Zangwill, Nick 2007, Music, Metaphor, and Emotion *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 65:4 Fall 2007, 391-400.
- 33) Mandoki, Katya 2007, *Everyday aesthetics: prosaics, the play of culture, and social identities*. Aldershot: Ashgate
- 34) Traganou, Jilly 2009, National and Post-national Dynamics in the Olympic Design:the Case of the Athens 2004 Olympic Games. *Design Issues*: Vol.25, No.3 Summer 2009, 76-91.
- 35) Delbourgo, James 2011, Sir Hans Sloane's Milk Chocolate and the Whole History of the Cacao Social Text 106, Vol.29, No.1, Spring 2011, 71-101.
<http://dx.di.org/10.1215/01642472-1210274>
- 36) Schiestl, Florian P. and Dötterl, Stefan 2012, The Evolution of Floral Scent and

Olfactory Preferences in Pollinators: Coevolution or Pre-existing Bias? *Evolution* 66-7:2042-2055.

<http://dx.doi.org/10.1111/j.1558-5646.2012.01593.x>

- 37) Loveman, Kate 2013, The Introduction of Chocolate into England : Retailers, Researchers, and Consumers 1640-1730, *Journal of Social History*, Fall 2013, Vol. 47, Issue 1, 27-46.
- 38) Weinstein, Netta, • Legate, Nicole • Przybelski, Andrew K. 2013, Beauty is in the eye of the psychologically fulfilled: How Need Satisfying experiences shape aesthetic perceptions of spaces. *Motivation and Emotion* 2013, 37:245-260.
<http://dx.doi.org/10.1007/s11031-012-9312-7>.
- 39) Jagoda, Patrick 2013, Fabulously Procedural: *Braid*, Historical Processing, and the Videogame Sensorium. *American Literature*, Volume 85, Number 4, December 2013
<http://dx.doi.org/10.1215/00029831-2367346>, 745-779.
- 40) Mandoki, Katya 2013, *El indispensable exceso de la estética* Siglo veintiuno editores, Kindle Cloud Reader, <https://read.amazon.co.jp>
- 41) Page, Paul, Favre, Adrian, Schiestl, Florian P., Karrenberg, Sophie 2014, Do Flower Color and Floral Scent of *Silene* Species affect Host Preference of *Hadena bicurris*, a Seed-Eating Pollinator, under Field Conditions? PLOS ONE www.plosone.org June 2014 Vol. 9. issue 6. e8755, 1-9.
- 42) Slow Food 2015, http://www.slowfood.com/international/7/history?-session=query_session:CAF240FC144ab0F233xYB56C7D4A
- 43) Kant, Immanuel 2015, *:Kritik der Urteilskraft: Lesefassung mit einleitendem Kommentar*, Siegfried König, Klassische Werke der Philosophie, Kindle Cloud Reader <https://read.amazon.co.jp>